

## 女性もいいもの!?

田中みどり

高山赤十字看護専門学校

新たな出発に向け準備中の武市さん、ご紹介ありがとうございます。あなたは登山、オートバイ、ハングライダーなどと多趣味でボーイッシュなのかと思えば、とても手先が器用でしたね。あなたが退職のとき病棟の皆に作ってくれたネーム入りのランジェリー入れは、いまでも大切に使用させてもらっています。いつも自分を大切に育み、新しいものへチャレンジしていく精神はうらやましい限りです。次にはまたどんな報告が聞けるのか楽しみにしています。

## 学 び

常々、なににかにつけ「女性は損」と感じていた私は、幼いころから女性として生きるより人間として生きるんだとこだわってきました。親にいわせると、気難しくとても扱いにくい子だったとのこと。

結婚などせず、一生続けられ、生活にこまらない仕事につこうと思っていました。そのなかでも女性にしかできないお産にかかわれる助産婦になろうと決意したのは、高校1年生の夏でした。

助産婦になるための前段階として入学した看護学校の母性臨床実習での思い出は、「助産婦さんは恐い」の一言につきます。ある日、助産婦さんに、「ちょっとみてて」と言われ、素直に陣痛室で頑張っている産婦さんの顔をそばについてじっとみていました。

すると「どこをみとったんや、バカー!!」と叱られたのです。それもいままさに分娩しようとされる産婦さんの前で(産婦さんは発露にまで進行していたのですが、当時の私には、外陰部の状態を観察することなど想像もつかなかったのです。恥ずかしくて学生なんかがしてはいけないことと受

けとめていたのです)。いまでもしっかりと記憶しているあの「バカ」は、新しい生命の誕生に真剣に向き合っていたからこそその言葉だったと、助産婦となった私自身を戒める言葉になっています。

助産婦1年目。さまざまなことを学びました。胎児心音が悪くなったり回旋が悪くなったり。連絡をとってから、医師の来棟されるまでの時間が長かったこと。さらに診察後、廊下を徘徊しながら考え、帝王切開と決定するまでの時間が長かったこと。早くなんとかしたい、してほしいと焦る私は、最後まで望みは捨てず、できるだけ自然に、待てるだけ待つということを、このとき学びました。

## 体 験

私自身は、助産婦2年目に結婚、4年目に出産を経験しました。結婚相手は、田舎の長男で、女はだまって男に従うもの——そんな考えの持ち主でした。二言めには「女のくせに……」と来るので、自分の選択ミスに葛藤の日々が続きました(このことについては、10年目を過ぎる頃から、お互い自分の理想に少しずつ近づいてきたと密かに喜んでいる次第です)。

妊娠満39週で出産したわが子は、2310gの低体重出生児だったので、未熟児センターへ入院となりました。陣痛発来から2時間すると努責感があり、こんなに早くおかしいなという思いと、うまく努責感をのがすことができない思いとで、いままではまんでくれるものとして指導していたけれど、当の産婦さんは辛かったのだと気づいた瞬間でした。そのうえ、分娩室近くの褥室からは「助産婦さんがお産するんやっていうけど、えらく騒がしいね」という声も聞こえてきました(外の話し声



まで覚えているのは余裕があった証拠?)。

お産には、夫も立ち会ってくれましたが、分娩の経過が早かったことと、私が「産ぶ声をとれ、写真をとれ」と要求したため、わが子の誕生を十分楽しむことができなかったようです。そして夫曰く、「君のお産は、犬より軽かったんじゃない？」でした。それでもわが子の出産に立ち会うことで自分も、同じようにこんなふうになまれて来たということを実感してもらえただけで満足でした。

お産はすんだけど母と子は離ればなれ。3時間おきの搾母乳は、首や肩のこるものでした。直接授乳ができるようになって、哺乳量は、0・2・4gの一桁台で、乳首を離すと子供は泣き、自分も眠れず疲れ果て、マタニティ・ブルーも乳腺炎も経験させていただきました。そのたびに先輩・同輩の助産婦の愛情あふれる直接的なケアに助けいただきました。

## そしていま

現在、私は母校の看護学校の教員をしています。妊産褥婦や新生児への直接的ケアの場を離れて実習に行き、分娩があると聞くと一番張りきっていた時期もありました。

倍も違う若い学生達が分娩見学をつうじて生命の尊さ、すばらしさを感じとってくれるのをみるたびに、すべてに伸び盛りの若い人々といられる喜びを感じます。どのひとにもこの感動を味わってもらうことはできないものか、それのできるだけ若い時期に、と思います。

夫や実母以外に上の子どもも出産に立ち会うケースに出会うたびに、もっと病院をひとの生も死も家族とともに喜び、悲しめる開かれた場にした

いものと、少産少死、核家族化の進んでいる現代だからこそ感じます。

いま、日本の女性は、社会で活躍する場も広がり、結婚するもしないも、子供を産むも産まないも、一世代前の女性より多くの選択肢の中から選べるようになりました。しかし、結婚・出産・育児・介護に直面するたびに、女性は仕事を続けようとしても法律的な保障はまだ十分とはいえず、女性だけが仕事と家事・育児の両方をうまくやるようにと努力を要求されます。自分自身をふり返ると、どちらも中途半端だったといわざるをえません。

学生達は、出産を契機に退職し、子育てが一段落してから再就職しようと考えているようで、育児はそれほど責任あるものといえそうです。彼女たちには、家事・育児は女性だけのものと抱き込まないこと、がんばりすぎないことを伝えたいものです。

日本の男性の家事労働時間は1日20分ほどですが、もっと男性の家事・育児についての意識を高め、生活する術を身につけてほしいものです。そのためには、女性自身の意識改革がさらに必要といえます。私自身も、遅まきながら、2人の息子の未来のパートナーのためと自分が楽をするために、息子たちを家事に駆り出す苦心をしております。そして、こんな女性としての生きかたもまんざらでもないと感じる今日この頃です。

さて次は、助産婦学校の同期で、研修も一緒だった大槻イマ子さんにバトンタッチします。大槻さんは現在、福島赤十字病院にご勤務で一所懸命の誠実な方です。